

# 豊明希望チャペル(イースター)礼拝

2026/4/5

「死者の中からよみがえらせた」

使徒 13 : 13~31

今日の箇所は、前回に引き続いて、キリスト教の世界宣教のはじめの報告であります。前回のところでは、エルサレムの北にあるアンテオケ教会が、地中海のキ



プロス島あたりで、次々クリスチャンが生まれているから、宣教師を派遣したいとなって、エルサレム教会の許可を得て、パウロとバルナバという、いわばキリスト教最初の(海外)宣教師を、送り出すと言う事になって、まずは、キプロス島で伝道し(前回まで)、次に、今日の箇所からは、キプロス島から、いよいよアジア、ヨーロッパ

へと、伝道の幅を広げていこうとしました。地図を出しましたから、まずは、今日の冒頭の聖句を見ましょう。

**「13:13 パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。」**

**13:14 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。」**

パポスというのは、キプロス島の西にある町で、そこから、船でヨーロッパ大陸の今のトルコのパンフィリア地方のペルゲに渡り、そこから内陸のピシディア地方のアンティオキアまで行きました。そしてユダヤ教の会堂に入りましたという、まずは報告です。当時もきっと、こんな地図を広げて、これからの宣教計画というのをたてたのだらうと思います。



先日、以前、牧会していた青梅キリスト教会が開拓した伝道所から、設立20周年のはがきが届きました。これが、現在の教会堂ですが、この教会の始まり

のことを考えておりました。それはさかのぼること、1995年でした。この教会も関係があるチーム宣教団から、会いたいとの連絡が来ました。当時、責任者であった宣教師が、会堂の机の上に、まさに、今日の箇所ではありませんが、地図を広げました。先生は、その地図を指さしながら、日本の宣教で、空白地帯があると、それが埼玉県南から、東京の青梅市に広がる地域だと、それで、ここに宣教をしたいから手伝って欲しいということでした。私たちは、すでに、羽村市と、山梨県の大月市と、伝道所を出しておりました。どこまで協力できるか不安はありました

が、宣教師を遣わすということでした。その宣教活動の後、愛知県の南山大学(短大部)の英語教師として遣わされた、ルツ・コンバルメ宣教師でした(お知り合いの方々もおられると思います・・・?)。

当時の、記録を見ますと、宣教団の考えと、教会の考えに考え方の違いがあって、いろいろと話し合いを重ね、いわば、もめた様子が書かれています。そもそも、どこが決め、どこが主体的に宣教を担うのかということから始まって、それぞれに、考え方の違いがあったからです。

ここの箇所、前回も触れましたが、こんな一言があります。

**「ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。」**

後のことになりますが、この小さな記録は、あとから、まさに「もめて」大きな宣教方針の違い、あるいは、誰が、この宣教を進めるのかという違い、あるいは分裂となって表れます。

**「15:39 こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、**

**15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」**

激しい議論は、パウロとバルナバと一緒に伝道することを困難にしたのです。そのきっかけは、このマルコという弟子を連れて行くかいかないかの、今日のところにきっかけがあるということです。このことにあと少し触れますが、前回、このヨハネ・マルコとよばれる人について少し話しました。このマルコの家は、エルサレムで、キリスト教徒の最初の拠点となったところでした。母親が信仰熱心で、使徒、また弟子達に協力し、その息子でした。このパウロとバルナバの二人のチームの、このバルナバの親戚でもあったようです。教会も、人間の集まりである以上、たとえば、このように親戚への親しさや、若い者に対するケアを優先する一方で、仕事するなら、まして、神さまに仕える宣教の仕事なら、ちょっとやそつとのことで、故郷の母のもとへ帰ってしまうなどというのは、ダメだと言うパウロの考えに違いがあって、ついには、一緒には、働けなくなるというのは、ありうることであり、簡単に言ってしまうと、どちらが正しくて間違っているとは言えない、いつでも、どこでも、教会でも起こりうることであります。

このことについては、この使徒の働きでは、先ほど引用した 15 章でもう一度触れることとなりますから、ここまでにしておきますが、一点だけ、触れて、教えられることとしたい点は、この書をかいているルカというクリスチャンが、このような、世界で最初の海外宣教、その、いわばめでたきスタートにおいて、共にそのスタートを切れぬ人もいたと、途中で逃げ帰ってしまった仲間もいましたよという報告が、聖書がいかに誠実で、いかに正直な書であるかということを示すと共に、神が、このような人間の弱さや、足りなさを通しても(その弱さは、マルコだけでなく、身内びいきとなってしまったバルナバ、頑固なクリスチャンにも見えるパウロを含めて)、なお、あわれみの内に、神は、また聖霊は、そんな彼らに働かれて、御言葉の宣教の御業は確かにすすめられていったことに、大きな慰めを受けるのです。



それは、先ほど私の経験した具体例である、青梅の西の端での一つの宣教活動でも同じ事を思うのです。考え方の違いもあった、人間の足りなさゆえに、もめたこともあった、この業が、教会が、いつ潰れてしまっても不思議はなかった、しかし、この一枚のはがきの 20 周年記念会を迎えたとの報告が、たしかに、これは、神の業であった、神が私たちをゆるし、あわれみのうちに用いてくださったからこそ、御言葉の宣教の御業が進んだのだと、たしかに主の御業であると、大きな慰めを受けるのです。

ルツ先生の退いてからは、ドイツのクレーマン宣教師、シュカト宣教師、そして、韓国の廉(よん)宣教師、そして、日本人で、私が

最初に洗礼を受けクリスチャンとなった大倉牧師が、この教会の働きを継続していることに、今日の記録は、昔の記録ではなくて、主の働きが、今もある事、働いていることの証しであることを思うのです。

この豊明希望チャペルにあって、総会報告を書いている、多くの宣教師と、中島先生はじめとする日本人の多くの牧師が関わらせていただいたことを思うとき、もっと、そのことを思うのです。それは、私たちの弱さではなく、神の圧倒的な強さと、あわれみ、許しの中で、宣教が進められる、御言葉の宣教がなされるといふ励ましであります。

さて、残りの箇所にすすみます。15 節以下です。

先に触れたピシディアのアンティオキアのユダヤ教の会堂で、パウロが、福音を伝えることになりました。

**「13:14 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。」**

**13:15 律法と預言者たちの書の朗読があった後、会堂司たちは彼らのところに人を行かせて、こう言った。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのために何か奨励のことばがあれば、お話しください。」**

**13:16 そこでパウロが立ち上がり、手振りで静かにさせてから言った。「イスラエル人の皆さん、ならびに神を恐れる方々、聞いてください。」**

立ち上がったパウロは、距離はありますが、同じ小アジアの、ローマ領のタルソがその出身地で、預言者故郷では敬われずと言いますが、パウロは、その故郷にあって、奨励(説教)をすることになりました。また、パウロが殺したステパノ、おそらくその日、パウロが服の番をして、その光景を見ていた、最後のステパノのメッセージときわめて似た、そんな、ほぼ同じメッセージを、今度は、彼が、するこ

とになります。

16 節以下がその内容ですが、アブラハムから始まって(：17)、モーセの時代(：17～18)、士師の時代(：19～20)、王国の時代(：21～22)、そして、イエス様に至るまで(：23)の神様の歴史からメッセージは、なされます。最後の預言者バプテスマのヨハネが現れ(：24)、ここまでの、あらゆる預言が、イエス・キリストにおいて成就したこと(：23～26)、しかし、ユダヤ人は、歴史の中でことごとく失敗し神を裏切ってきたが、相変わらずで、これを殺した(：26～28)、しかし、神は、そんな罪ある人間の為に、イエス・キリストをよみがえらせたと言います。復活を語ります。

ここは、読みましょう。

**「13:28 そして、死に値する罪が何も見出せなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めたのです。3:29 こうして、彼らはイエスについて書かれていることをすべて成し終えた後、イエスを木から降ろして、墓に納めました。13:30 しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。」**

特に、「**神はイエスを死者の中からよみがえらせました。**」という点に力が入られて語ります。ここからは、次回のところになりますが、このイエス・キリストの死者からの復活については、何度も、ここにこそ、神の福音があり、私たちに罪人である人間の希望があるという語ります。

**「13:34 そして、神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちて滅びることがない方とされたことについて」**

**「13:37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちて滅びることがありませんでした。」**

そして、「**13:39 この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。**」と語り、また、このパウロのメッセージは、当時の、ユダヤ教の人達からは、「**13:42 二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。**」と、ルカは報告し、当時の人々に受け入れ、信じられたことを報告します。

今日は、ここにパウロが強調した、イエス・キリストの復活の記念日イースターです。今朝、この復活のメッセージを聞けることを感謝したいと思います。神さまは、イエス・キリストを十字架につけた張本人であるユダヤの人々を、イエス・キリストは、あなたがたは殺したが、よみがえって、あなたがたを赦し、神の信じ、このキリストの罪の贖い、救いを信じる者が、義と認められて、神の子どもとなることを、神の国に入ることが出来るようにして下さると、招いていて下さるのです。

ルカが、この報告をするとき、この世界宣教のはじめ、マルコが脱落してしまったこと、エルサレムに帰ってしまったことなど、まるで、気にしていないように、当たり前書き加えるのは、そんなマルコも、頑固なパウロであっても、身内びいきに過ぎるかもしれないバルナバであっても、気にしないかのごとく、それほど、

キリストの贖いの力、復活の力は大きいことを信じているからであります。



今日は、そのキリストの復活を記念する日、イースター。C Sでは、卵探しをしたり、卵がらみの行事があります。

卵は、新しい命が、そこから出てくる、その印だからです。まるで何もない、ただ丸いだけの、人間の形など何もないところから、命が芽生えてくる、そのように、私たちの

罪が赦され、完全な人間体、神の像であるアダムのような、完全な神の子とされ、永遠の命が与えられる、その希望を示す、復活の記念日です。

今一度、今日教えられた、この御言葉を確認して終わりたいと思います。

**「13:30 しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。」**

私たちが殺したイエスを神はよみがえらせた。私たちの罪によって、救いの希望、キリストが消えてしまったのではない。神は、希望の光を消さない。死からでもよみがえらせる。

この復活の記念の日。

そして、この復活の週の歩み。今週の歩みが、罪の歩みであっても、悔い改め主の前に出る時に、赦され、希望の光が消えそうなきにも、いえ、消えても、再び、希望を与え、救いと癒やしを与えてくださる、この主に、神に、感謝と賛美の内に従っていく、祝福された歩みでありたいと願います。